

経験の要請と実体的紐帯

後期ライブニッツにおける複合実体の問題

三浦隼暉（東京大学大学院人文社会系研究科, 日本学術振興会特別研究員DC2）

1. はじめに

■ 本発表の目的

後期ライプニッツのテクスト、とりわけデ・ボス宛書簡において登場する「実体的紐帯（vinculum substantiale）」概念を検討することを通して、この時期のライプニッツが異なるふたつの問題の系譜に応じて自身の哲学を推し進めていたということを明らかにする

■ ふたつの問題系

1. いかにして単純実体としてのモナドが複合実体ないし物的実体を合成するのか
2. 心身結合や有機体といった経験に与えられる現象を可能にしている原理とは何か

■ 1713年8月23日のデ・ボス宛書簡における実体的紐帯の変更をどのように理解すべきか

- ・ 同一の問題系における新たな概念の登場として理解する場合

モナドに全てを還元するという哲学の失敗と新たな哲学の構想（観念論から実在論）

- ・ 異なる問題系における新たな概念の登場として理解する場合

モナドに全てを還元するという哲学は保持されたまま、経験の要請への応答というもうひとつの探究が行われていた

■ 本発表は後者の可能性をさぐる

目次

(p. 2 の概要参照)

1. はじめに
2. 化体の問題と実体的紐帯概念の登場 (p. 2)
3. 変容する実体的紐帯をめぐって (p. 5)
4. 経験の要請と実体的紐帯 (p. 11)
5. おわりに (p. 15)

2. 化体の問題と実体的紐帯概念の登場 (p. 2)

■ デ・ボスの問いに対するライプニッツの回答（1709年9月8日の書簡）

1. 通常のパンの、パンとしての実体性は諸モナドの「結合」に存する
2. この結合を放棄することでパンはパンとしての実体性を失う
3. ここにキリストの肉体の実体性を付与すると、パンはキリストの肉となる

- 実体的紐帯概念の登場（1712年2月15日の書簡）

結合を支えるものとして実体的紐帯という概念が提出される

- 〈部分の外在に基づいた延長〉と〈単なる現象としての延長〉

実体的紐帯は結合的なものとして外在的モナドの存在を保証する

実体的紐帯がないとすると、すべては単なる現象としての延長となる

→ パンの実体的紐帯が取り去られたとしても、パンとしての延長現象は同じ

（部分の外在が保証されているかどうかという点で異なるだけ）

3. 変容する実体的紐帯をめぐって (p. 5)

補足

1713年8月23日を境にして、紐帯概念は変更される

- 最初に提示された紐帯を「実体的紐帯Ⅰ」
- 新たに提示された紐帯を「実体的紐帯Ⅱ」とする。

実体的紐帯Iについて

- 「より完全な関係」としての紐帯
 - 特殊化され物象化された予定調和
 - ただし、それは予定調和の系譜に属するもの

実体的紐帯 II について

- デ・ボスからの批判
 - 絶対的なものの集合だけでは、複合実体を構成しない
 - 絶対的なものの集合に介在する実体として
 - 複合実体と同一視されるようなもの（ロビネ）
 - 実体形相だとも言われうるもの（複合実体からの区別）
- 第二質料と密接に関わる、独立した実体としての紐帯

4. 経験の要請と実体的紐帯 (p. 11)

- トウルヌミーヌによる『新説』批判（1703）

予定調和だけでは不十分で、「実在的で実効的な結合」が必要

- これに対するライプニッツの対応（1709年4月30日のデ・ボス宛書簡）

トウルヌミーヌの言うような「形而上学的結合」を否定はしないが、説明できない

ライプニッツ自身は予定調和だけで十分であると考え

- **デ・ボスの批判とトゥルヌミーヌの批判とに対する対応の差異**
どちらも結合を諸モナドに還元可能な予定調和に求めることに対する批判である
 - ・トゥルヌミーヌに対しては、予定調和を維持する回答
 - ・デ・ボスに対しては、予定調和的な実体的紐帯Ⅰを変更して、実体的紐帯Ⅱを提示
- **デ・ボスの批判は紐帯概念変更の決定的な原因ではなく、単なる機会**
では、紐帯概念の変更は批判以外の何に依拠するものなのか

■ 経験の要請が実体的紐帯Ⅱを準備する

- ・ 有機体論：動物の不死から、その不死に対応する実体的紐帯Ⅱが提示される
- ・ 心身結合：トウルヌミーヌの「実在的で実効的な結合」を引き継ぐ
「現象が我々に示しているところの連続的なものの紐帯」
→ この概念もまた実体的紐帯Ⅱと連続的なものである

■ 概念の変更は同一問題系ではなく異なる問題系に属する事態

いかにして諸モナドから現象を構成するか、という問題系ではなく

経験に与えられた現象を可能にしている原理は何か、という問題系において

実体的紐帯Ⅱが提示される。

■ このことは、**実体的紐帯Ⅰと実体的紐帯Ⅱの両立を可能にする**

- ・ モナドからの探究に属する実体的紐帯Ⅰ
- ・ 経験の要請への応答の探究に属する実体的紐帯Ⅱ

同一問題系において両立しないが、異なる問題系が並行する限りにおいては、両立可能

5. おわりに (p. 15)

■ ふたつの問題系の往復運動

ライプニッツは、モナド概念の適用可能性と経験の要請への応答可能性の両方を考える

彼が観念論者か実在論者かという問題は、このどちらかを見落とすこととなる

■ これらの探究はどこかで一致するのだろうか？